

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月1日現在

機関番号：74331

研究種目：基盤研究B海外

研究期間：2010年～2012年

課題番号：22402044

 研究課題名（和文）インドの農村の貧困女性たちの経済的自立について
 ～成功と失敗を分ける分岐点は何か～

 研究課題名（英文）Economical Independence of Rural Poor Women in India : What are the
 Crossroads between their Success and Failure

研究代表者 山下明子

（公財）世界人権問題研究センター 研究第4部 客員研究員

研究者番号：20465959

研究成果の概要（和文）：インドの農村で経済的に自立しようとしている底辺層の女性たち、具体的には、政府の貧困女性対象の少額融資制度と結びついた SHG（自助グループ）を、農村のダリット女性を中心に、成功と失敗の要因、NGO との関係、また、政府の SHG 政策の変更について調べた。成功したグループは地域も変化させたが、ローン本位になり潰れたケースも多い。貧困女性の SHG の成功と失敗の分岐点は、グループの自立的で協同的な意思決定力の如何にあるとわかった。

研究成果の概要（英文）： This research was done on the economic independence of the poor rural women living at the bottom of Indian social ladder. It analyzed on micro-credit based SHGs of the Indian government program for the poor women. It studied how SHGs were formed among rural poor women and trained by NGOs to various group activities and entrepreneurs, which have drastically changed both the women and villages. It also examined what happened after the policy change of Indian government on the SHGs. It is to examine how dalit women can recover their pride and confidence in their economic independent-oriented activism from century-old sexual discrimination and violence. The crossroads of their success and failure are on the independent and cooperative power of their decision-making.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
H22年度	2,200,000	660,000	2,860,000
H23年度	1,700,000	510,000	2,210,000
H24年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	4,900,000	1,470,000	6,370,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：基盤研究 B、海外

キーワード：インド、農村の貧困女性、マイクロクレジット SHG、経済的自立、

1 研究開始当初の背景

インドは多民族、多言語国家で、独自の社会制度をもつ国である。人口の約80%はヒンドゥー教徒で、ヒンドゥーのカースト制は農村部では根強く、女性への影響はとくに強い。被差別カースト（ダリット）や部族民（アディヴァーシー）が多いムスリムやキリスト教徒、仏教徒の場合も同様である。

研究者は南インドのタミール・ナードゥ州の農村で活動するダリット女性のNGOと1980年代から関わりを持ってきた。この地区の下層女性たちは、差別と暴力、飢え、コミュニonal衝突によって孤立していた。ところがこの地区が10年間で大きく変化した。貧困女性のSHGが1000以上生まれ、カーストや宗教をこえた協力関係も生まれた。

しかし、辺鄙な農村部での女性の経済的自立は容易ではない。女性だけがローンを負って多忙になる。あるいは起業しても返済できずに失敗するグループも多い。2006年来、SHGは政府直轄となり、これまでNGOが行ってきた女性の意識覚醒と自立目的の各種トレーニングがなくなった。NGOはボランティアでグループや個人からの相談にのっているが、NGOが活動を停止し、ダリット女性のSHGのほとんどが潰れた地域もある。

2. 研究の目的

貧困女性のSHG活動により、女性たち自身の生活はもとより、地域にも歴史的な変化が起きている。どのような変化がどのようにして起きたのか。また、進行するグローバル経済下で、土地無し農民の経済的自立はどのように可能か。失敗したグループにどのような共

通理由があるのか。グループ間の協力関係が不可欠であるが、カーストや宗教間、また既得権益層からの妨害をいかに乗り越えられるか。中央政府の政策は村落でいかに実行されているのか。これらを調べる。

3. 研究の方法

現地でのフィールド調査を中心とした。南インドの場合と比較するために、M. ガンディーの出身地である西インドのグジャラート州のアフマダーバードを中心に、インド最大の女性自営組合であるSEWAを通して、都市と農村の貧困女性の経済的自立の状況を調べた。また、かつてイギリスのインド植民地の首都であったインド東部の西ベンガル州のコルカタおよび農村部でも調査した。これにより、政府による施策、NGOの役割、および貧困女性たち自身の自立的な働きが「成功」のためにどのように有効であるかを調べる

4. 研究成果

以下の目次内容で研究成果を明らかにした。

- 1 はじめに一視点と調査方法
- 2 インドの貧困問題とカースト、宗教、ジェンダー
 - 2-1 経済的貧困とカースト
 - 2-2 宗教とジェンダー
- 3 インドのマイクロクレジットと貧困女性の自助グループ（SHG）
 - 3-1 インドの SHG 政策の特徴
 - 3-2 キリスト教系の NGO による SHG つくり
- 4 南インド・タミール・ナードゥ州の場合

4-1 ヴィルップラム県メルマライアヌル地区

- 4-1-1 地区の特徴と NGO の働き
- 4-1-2 SHG の作り方と運営
- 4-1-3 ダリット女性の変化
- 4-1-4 SHG の活動内容と地域の変化
- 4-1-5 SHG の変貌と NGO の課題
- 4-1-6 「息子が欲しい」(個人面談のケース①)

4-2 ティルヴァンナマライ県アールニ地区

- 4-2-1 地区の特徴と NGO
- 4-2-2 SHG の活動と地域の変化
- 4-2-3 課題
- 4-2-4 「障がい者の独身女性の成功」(個人面談ケース②)

4-3 コインバトル県ヴァルパライ地区

- 4-3-1 地区の特徴と NGO
- 4-3-2 SHG の活動と課題
- 4-4 その他の地区の状況
- 4-4-1 「SHG よりもエンパワーメントが大事だ」(個人面談のケース③)

4-4-2 「娘を殺されて」(個人面談のケース④)

5 南インド・カルナータカ州の場合

- 5-1 コーラール県 KGF 市
- 5-1-1 KGF の特徴と NGO
- 5-1-2 KGF の SHG 活動と地域の変化
- 5-1-3 課題
- 5-1-4 「若者たちの願い」(個人面談のケース⑤)

5-2 コーラール県の農村

- 5-2-1 SHG 活動と地域の変化
- 5-2-2 NGO の困難と課題

5-3 コーラール県バンガラペット市

- 5-3-1 ダリット居住区の SHG
- 5-3-2 セックスワーカーの自助グループ

5-3-3 「セックスワーカーの現実」(個人面談のケース⑥)

6 西インド・グジャラート州の場合

- 6-1 SEWA の理念と実践
- 6-2 SEWA のサンガム運動
- 6-2-1 SEWA 銀行
- 6-2-2 アーメダバード市の自営女性組合
- 6-2-3 ガンディナガル県の農村の酪農協同組合

6-2-4 メーサーナ県の農村の植林協同組合

6-2-5 ヴァドーダーラ県ボデリの農村の SHG

6-2-6 「産婆が村を変える」(個人面談のケース⑦)

7 インド東部の西ベンガル州の場合

- 7-1-1 コルカタについて
- 7-1-2 HIV 感染者の SHG 活動
- 7-2 「HIV に感染して」(個人面談のケース⑧)

7-3 ベンガルの農村の SHG 活動

8 農村の貧困女性の経済的自立-成功と失敗の分岐点

9 おわりに

全体が大部なので、ここでは9の「おわりに」の部分を書いて、報告としたい。

経済成長という大きな変化のなかにあるインドを、差別と極端な貧困、そして日常的に性暴力に晒されて生きているインドの底辺女性、とくに農村の被差別カーストの女性たちに焦点を当てながら、マイクロクレジット SHG を通して調査した。ダリットという言葉を使わず、特定の不可触民カーストのみをハリジャンとよぶ SEWA のような女性組合もある。ダリットは政治的な用語であるとして、

もっぱらヒンドゥーSC を使うベンガルの場合も、クリスチャン人口が少ないから可能である。南インドのようにダリット・クリスチャン人口が多い土地と、グジャラートやベンガルのような土地では、キリスト教系の NGO による SHG つくりにも違いが見られた。

面談を中心に調査を行ったが、どの土地であれ、面談相手の気持ちを聞くことを優先した。事実かどうかよりも、話し手がどのような気持ちで語っているかが大事である。彼女の SHG 参加と活動がどのように有効だったか、どのように生活と生き方が変化したかを聞いた。時には通訳と英語での言い争いになったが、そのような時ほど、面談相手のほうが調査の意図を察して、正直に答えてくれた。若いエリート女性が通訳の場合にこれが起きる。プロではない通訳は「聞くまでもないことだ」、あるいは「自分のほうが知っている」と思い、通訳せずに直接に英語で答えようとする。しかし、たとえ答えは同じだったとしても、面談相手がどのような表情で答えるかを見逃さない。また、実際に通訳が知らないことのほうが多いのである。同じ国民だ、あるいは同じ州の人間だ、というだけで理解できるほど単純ではない。

差別と貧困と暴力の体験者はあくまでも個々人であり、回復のプロセスもまた個々人のものである。それが SHG という同じ村内の女性グループの結成によって、どのように可能になったか、それにより家族だけではなく村社会と政治はどう変わったかを報告者は調査してきた。差別と貧困と暴力を体験するのは個々人であっても、それを起こす構造は共同体的だからである。

今回の調査では商業売春で働く女性たちも面談したが、一般の SHG 会員からも DV だけではなく、さまざまな性暴力の実態がで

きた。幾つかのケースを具体的に挙げたように、現在の SHG ではたとえ数がさらに増加しても解決できないだろう。インド全土で深刻な性暴力は性のカーストと切り離せないからである。ダリットやアディヴァーシ（トライバル）の女性や子どもたちが上層カーストや自分たちの男から日常的に被っている性暴力については、これまではメディアも無視し、警察と司法や行政もむしろ加担してきた。しかし、グローバル経済によって都市化がすすみ、女性の高学歴化によってジェンダー再編がすすむと、外で働きはじめた上層カーストにも性暴力の犠牲者が増え始めた。

2012年12月にニューデリーで起きたバス車内での集団強姦事件は国内外のメディアで大々的に報じられた。被害者の学生が亡くなったことで、抗議のデモが全国に広がり、インド政府は強姦罪に死刑の適用まで検討している。これまでも強姦罪は終身刑だったが、裁きの実態とはかけ離れている。インドの首都ニューデリーは「レイプ都市」と呼ばれるほど、働く女性にとって危険な都市となっている。男性たちの女性軽視、性のカースト意識が変わっていない証拠であろう。例えば、グジャラートの SEWA の場合でも、SEWA がしっかりと根を降ろしているアフマダーバード市ならともかく、デリーSEWA の会員に起きる性暴力事件には SEWA も対応が困難である。アフマダーバードでは SEWA に協力的な警察もデリーの事件には「管轄が違うから」と取り組めない。

下層カーストの女性や貧しい地方でおきる事件を軽視する社会は、やがて被害が自分たちに及んできて始めて気づくことになる。一方で、高額のダウリー（持参金）や「名誉の殺人」がダリットなど農村の下層女性にも及んできている。経済発展が性的な暴力を助

長しているのである。報告者はインドの中でも最も良い意味での変化をおこした地域を中心に調査した。SHG の女性たちは困難を抱えながらも次のステップへと向かっている。しかし、女性 NGO の活動や SHG が盛んでない州や地域の状況は、冒頭で述べたような女児の中絶、女児殺し、ダリットの子女への残虐行為など、はるかに深刻であろう。グローバル経済と軍事主義が世界を覆っている今日、インドだけではなく世界の下層に置かれた女性たちの真の経済的自立こそ緊急の課題であると考えます。

(3) 連携研究者 なし

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

「インドの農村の貧困女性たちの経済的自立について」『(公財) 世界人権問題研究センター研究紀要』第 18 号、p343-373、2013

「インドの宗教・社会統合・ジェンダーダリット女性解放の視座から」『現代宗教 2009』、国際宗教研究所編、p207-231、秋山書店、2009

「インドにおけるジェンダーとヒンドゥー・ナショナリズム-ダリット女性解放の視座から」『プール学院大学研究紀要』第 48 号、p61-77、2008

〔学会発表〕(計 2 件)

「性に関わる宗教と暴力の変容-インドの農村の事例を中心に」 「宗教と社会」学会、2012 年 6 月 16-18 日、長崎国際大学

「性暴力とナショナリズム-日本軍「慰安婦」問題を神学する」 テーマセッション「脱中心化の神学-マージンからの声」 「宗教と社会」学会、2010 年 6 月 5-6 日、立命館大学

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者 山下明子

(公財) 世界人権問題研究センター

研究第 4 部 客員研究員

研究者番号：20465959

(2) 研究分担者 なし